

経営(継業)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方⁶⁹

てんどうむそう 顛倒夢想

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし
経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。
http://www.hayakawa-planning.com
ブログ: http://amebio.jp/hayakawa-planning/

創刊から100回目を期して

本誌にて連載を記してから今号で100回目を数える。

東日本大震災は、地震や津波という自然災害に加えて、原発事故という人災が追い討ちをかけてしまい「原発は安全でクリーンなエネルギー」であるとの安全神話を打ち砕いてしまった。

神話とは、実体は明らかでないのに、長い間人々によって絶対のものとして信じこまれ、称賛や畏怖の目で見られてきた事柄のことです。「不敗神話」という使い方もある。

福島原発事故によって放射線の人体への深刻な影響が報道されるにつれて、これまで安全だと信じさせられてきた原子力に対する不安が社会を脅かしている。

このような状態を「顛倒夢想」というのではないだろうか。

「顛倒」とは、物の逆さまなこと。私たちがそういう目に遭うと、うろたえてしまふようなこと。

「夢想」とは、夢を見ること。転じて妄想、さらに転じて間違った考え方などのこと。つまり、誤解や妄想から誤りをおかし、それによってますます恐怖におののいてい

る状態といってもよいだろう。

世界唯一の被爆国である日本が、「原発は安全でクリーンなエネルギー」と喧伝しながら推進してきた原子力政策のあり方に対して、多くの国民が混乱の渦中にいるという過言ではない。誰が正しいのかにこだわるのではなく、何が正しいのかということに目を向けていかなければ、何ら解決の糸口さえ見つけ出すことはできない。

後ろ向きに歩く

「顛倒夢想」を乗り越えるには、「常・楽・我・浄」という四顛倒を極めることであるという。

- 一 モノは変化するのでにいつまでも変わらざるに思ふこと。
- 二 「常を常」と考えるのか、「無常を常」と考えるのか。
- 三 本當の樂を求めないで、苦を樂として居ること。
- 四 「樂を樂」と考えるのか、「不樂を樂」と考えるのか。
- 五 すべてが無我なのに我(自分)にこだわること。
- 六 「我を我」と考えるのか「無我を我」ととらえるのか。
- 七 心身は穢れているのに清いものだと思つて居ること。

「浄を浄」と考えるのか、「不浄を浄」ととらえるのか。

「○○」を「○○」と考えてきたが、それは勘違いであることがあるのだということ。

「○○だ!」と、鵜呑みにしてしまふことからはじまるような慣れの怖さは、原発事故の安全神話の崩壊からも明らかである。

「介護の社会化」を高らかに謳いつつ、走りながら考えることをモットーにスタートを切ったはずの介護保険制度だが、法改正の度に制度の持続可能性という大命題が突きつけられ、介護報酬改定の諮問・答申に偏重したスケジューリングが繰り返されるのみ。

団塊世代が75歳人口に全入する2025年に気がとられるばかりでは、これまでの軌跡を振り返る暇すら芽生えてはこない。

制度の習熟も良いが、それに慣れてしまう怖さがあると心して顛倒夢想するならば、反省すべきは反省し、改めるべきは改めると、後ろ向きに歩くことも必要だ。

振り返ると、前制度改正時は「因循姑息」*1、「先義後利」*2、「画餅充飢」*3などのタイトルが並んでいた。

*1 2009年4月号本誌本欄参照 *2 2009年5月号本誌本欄参照 *3 2009年7月号本誌本欄参照